1. The boy was carrying a rock which he would have thrown at me if we had not been running so fast. （静岡大）

【解答＆解説】

骨組みとその部分の訳は問題ないはずです。「その少年は which 以下の石を（手に）持っていた」となるでしょう。

問題は which節内の訳、更にそれをどう骨組みとつなげるかです。
まず which節内は以下のような仮定法の公式で書かれています。

If S_1 + had+p.p.～, S_2 + 助動詞の過去形 + have+p.p.….
「もしS_1が～していたら、S_2は…だったろうに」

そうすると which節内は「もし私達がそんなに速く走っていなかったなら、彼は私めがけてそれを投げつけていたことだろう」となります。
さて問題はこれをどう先程の骨組みとつなげるかです。

「もし私達がそんなに速く走っていなかったなら、彼は私めがけてそれを投げつけていたことだろう石を少年は手に持っていた」

ではチンプンカンプン(→o←)ゞ。
実はこんなときに役立つのが、スラッシュリーディングを活用した関係詞節のうまい訳出法です。こんなルールがあるのです

that節や疑問詞節、更に関係詞節等は、それが出てきたら、以下の例のようにその手前で訳をいったんまとめてしまうといい。

(ex) I like women who are kind to old people.

→ I like women / who are kind to old people.
「ボクはwho以下のような女性が好きです」「お年寄りに親切な(女性が)」

LESSON BOOK REVIEW Rule-62 3.(3) で、「関係代名詞の前にカンマ(,)があったら、カンマいったん区切るといい」と説明しましたが、実際関係詞節は、直前にカンマがあろうがなかろうが、そこで／で区切って、関係詞に先行詞を代入し、訳し下げるのがいいことが多いのです。そして「そして、しかし、なぜなら、」といった接続詞を、

区切った／のところで挟んであげると更にスムーズにつながります（どの接続詞にするかは文脈判断）。

そうすると本問も、関係詞節でいったん区切り、ここでは「そして」というつなぎ語を補って、以下のように和訳を完成させるといいのです。

「その少年は石を手に持っていた。そしてもし私達がそんなに速く走っていなかったなら、彼は私めがけてそれを投げつけていたことだろう」

2. Many critics and experts apprehend that children who are brought up under circumstances that limit their ability to learn within a relaxed and caring family tradition like that of the dinner table could lose an invaluable learning resource at an important time in their lives.

《語句》circumstance:状況、環境　　caring:愛情にあふれた
limit:～を制限する　　invaluable:非常に大切な
relaxed:打ち解けた　　learning resource:学習手段

【解答＆解説】

まず全体構造について。以下のような構造になっているのがわかったでしょうか。

Many critics and experts　apprehend　| that　S+V～ (接) |　.
Ⓢ 1　　Ⓢ 2　　Ⓥ　　O

apprehend は「懸念している」なのですが、もし分からなければ、、LESSON BOOK REVIEW　Rule-21　2.(1) を利用し、「思っている」と訳してみるとよかったでしょう。

次にthat節内の文構造ですが、children がS（主語）、could lose がV（動詞）、an invaluable learning resource がO（目的語）の第三文型（ＳＶＯ）になっていました。ＳとＶの間の（whoで始まる）関係詞節とその終わりをしっかりつかめたかどうかが（正確な構造把握のための）ポイントでした。以下に構造分析図も示してみます。

children
S

who are brought up under circumstances
関・代 V 育てられる 環境

that limit their ability to learn
関・代 V制限する O

within a relaxed and caring family tradition
～の中で 打ち解けた 愛情あふれた 家風

like that of the dinner table
夕食の場

could lose an invaluable learning resource at an important time in their lives.
V失う 非常に大切な O 学習手段 人生

their ability to learn within a relaxed and caring family tradition については、ability を able と形容詞化して以下のように文の形で読み直してみるとよかったのです。

⇒ they are able to learn within a relaxed and caring family tradition
S V (形)
彼らは打ち解け愛情あふれた家風の中で(ものを)学ぶことができる

それから指示代名詞の that は「the+既出の単数名詞」を表します。 that of the dinner table の that は the family tradition のことです(ただこの that は和訳には出す必要はない)。like は「～のような(に)」という意味の前置詞。

そうすると問題文全体の訳は以下のようになります。

「多くの評論家や専門家が懸念しているのは、夕食の場のような打ち解けて愛情あふれた家風の中で学ぶことができにくい環境で育てられる子供は、人生の重要な時期において非常に大切な学習手段を失ってしまう可能性があるということである」
limit を直訳するとこなれた日本語にならないのでここは意訳をした。

3. ①Most of us are said to spend a certain percent of our waking hours daydreaming or being lost in thought. ②A prominent psychologist defines daydreaming as shifting attention from some physical or mental task toward an unfolding sequence of private responses. (名古屋大 改)

《語句》 spend A(金・時間) doing～: Aを～することに使う
daydream:白昼夢(を見る)、空想にふける
be lost in A:①Aに夢中になる ②Aで途方に暮れる
shift A from B to[toward] C: AをBからCに移す、向ける
attention:注意
physical or mental task:肉体や頭を使う作業
unfold:(折りたたんだものを)開く、広げる、展開する
fold で「～を折りたたむ」という意味がある。unfold はその反意語。
response:反応

【解答＆解説】

①
ここは語句さえわかれば問題なかったでしょう。訳は「私達の多くは、起きている時間の一定の割合を白昼夢を見たり、物思いにふけったりすることに使っていると言われている」となります。
ただ spend の語法は頻出なので要注意です。他にも spend A(金・時間) on B(物事)で「AをBに使う」という語法もあり、こちらも頻出です。

(ex) My brother spends a lot of money on books. 兄は本にたくさんの金を使う

それから、certain は前から名詞を修飾する場合に(「確実な」という意味以外に)「一定の」「ある(種の)」という意味になることがあります。本問の certain もそれでした。

②
まずV(動詞)の define は define A as B で「AをBと定義する」ですが、これを知らなくても LESSON BOOK REVIEW Rule-26 8. に「動詞+A as B」となる形は、

「ＡをＢとみなす」という意味になることが多いと書いてありました。ここもそれを使えばなんとかなってしまいますネ。
prominent については、わからなければ(冠詞と名詞の間にあるので)形容詞と判断し、ここは good型とみなして「高名な」とでも訳せばいいでしょう(実際、prominent は「有名な、著名な」という意味)。

LESSON BOOK REVIEW Rule-67,68 を参照せよ。

a sequence of は「一連の」と訳し、ワンセットで形容詞とみなされます。本問ではこれに unfolding が割り込み、「(次々と)展開していく一連の」と訳せばよかったのです。そうすると②の和訳は「ある有名な心理学者は、白昼夢とは、注意を肉体や頭を使う作業からそらし、次々と展開していく一連の個人的反応へと向けることであると定義している」となります。

最後に a sequence of についてもう一言。このような (a[the])+名詞+of で(ワンセットで)形容詞的に訳すべきものは、知識として知っていないとおしまいです。そこでこれらを一覧にしてみました。しっかり未知のものについてはおさえておきましょう。

① a number of A / numbers of A「多くのA」 =many A
=a crowd of A / crowds of A
=a host of A / hosts of A
=scores of A

number の前に good, large, great, amazing(驚くほど), increasing[growing](ますます)等、いろいろな形容詞がつくことも多い。

(ex) An increasing number of people are giving up smoking.
たばこをやめる人の数がますます増えている

the number of A は「Aの数」。要注意。

(ex) What is the number of people present? 出席者(の数)は何人ですか

② a large amount[quantity] of A「多量のA」 =much A
=large amoutns[quantities] of A
=a good[great] deal of A

(ex) He spent a large amount of money during the trip.
彼は旅行中に多額のお金を使った

the amount of Aは「Aの総額、総計」。要注意。

(ex) What is the amount of money you spent?
君が使った金額は全部でいくらですか

=a volume of A / volumes of A

the volume of A は「Aの量」

(ex) the volume of water in a container 容器の中の水の量

③ a lot of A / lots of A 「多くのA」 ☜③は可算名詞、不可算名詞両方に使える。

=plenty of A

=a mass of A / masses of A

(ex) a mass of e-mails 電子メールの山

masses of treasure たくさんの宝

=a body of A

(ex) a large body of information 大量の情報

a body of water 水塊（池・湖・海など）

large body of the people 国民の大多数

=no end of A (切りがないほど)たくさんのA

(ex) I have no end of trouble 私はとても悩み事が多い

=loads of A

=a bunch of A

(ex) I asked him a bunch of questions 彼にたくさんの質問をした

a bunch of Aは「一束のA」「Aの一団[一味]」という意味になることもある。

=an abundance of A

(ex) an abundance of valuable information たくさんの貴重な情報

④ a handful of A 「わずかのA」 =a few[little]

(ex) Only a handful of people came to the ceremony.

ほんの数えるほどしかその式典には来なかった

⑤ a spot of A 「少量のA、ごくわずかのA」 =a little

=a trace of A / traces of A

(ex) I had a spot of whisky. 少量のウイスキーを飲んだ

=a hint of A

(ex) a hint of garlic ニンニク少々

=a bit of A

a bit of A で「一つのA」という意味になることもある。

⑥ a (certain) kind[sort] of A 「一種のA」

=a form of A

(ex) He had a kind of feeling that his son would soon come back.

彼はなんとなく息子がすぐにでも戻って来るような気がした

a kind[sort] of A を「Aの一種」、a form of Aを「Aの一形態」と訳す場合もある。

(ex) Ice is a form of water. 氷は水の一形態である

また all kinds[sorts / manner] of A は「あらゆる種類のA」となる。

⑦ hundreds of A「何百ものA」、thousands of A「何千ものA」
millions of 「何百万ものA」など。

⑧ a series of A「一連のA、相次ぐA」 =a sequence of A =a succession of A
=a chain of A =a train of A / trains of A
=a set of A =a sequence of A
=a course of A =a range of A

(ex) A series of rainy days made our vacation spoilt.

一連の雨(続き)で我々の休暇は台無しになった

⑨ a variety of A「さまざまなA、多様なA」 =various A =diverse A
=different A =varied A
=a diversity of A

(ex) The US has a variety of races. アメリカは多様な人種がいる

the variety of Aは「Aの多様性」。ただ、場合によっては a variety of A が、「Aの種類(一種)」となることもある。

(ex) I was surprised at the variety of his interests.

彼の関心事の多様性には驚いた

He discovered a new variety of dragonfly.

彼はトンボの新種を発見した

large, great, wide 等が variety の前につくこともある。

(ex) There were a large variety of flowers. 種々さまざまの花があった

⑩ a wide[large] range of A「広範囲のA」

(ex) shoes in a large range of sizes いろいろなサイズをとりそろえた靴

an area with a narrow range of temperatures 気温変化の小さい地域

a range[chain] of mountains 山脈、山並み

ただし「the range of A」は「Aの幅」と訳す。

(ex) The range of prices for gasoline was narrow in Japan.

日本では、ガソリンの価格の上下の幅はわずかだった

⑪ dozens of A「何十ものA」 thousands of A「何千ものA」
hundreds of A「何百ものA」 millions of A「何百万ものA」

(ex) This home page links directly dozens of useful sites.

このホームページは、何十もの便利なサイトと直接リンクしています

⑫ a bit of A　1.「少々のA」
(ex) a bit of money 少しの金
2.「ひとつのA」
(ex) a bit of luck ひとつの幸運

⑬ a couple of A　1.「２つの」「１対の」
(ex) a couple of eggs[girls]　２つの卵［２人の少女］
a couple of players　２人１組の競技者
2.「２、３の(=a few)」「いくつかの」
(ex) a couple of days ago 数日前に
☞of が省略されることもある。

⑭ an array of A「ずらりと並んだA」
(ex) an array of actors[umbrellas] ずらりと並んだ俳優[かさ]

⑮ a minimum of A「最小限(度)のA」
(ex) at a minimum of expense 最小限度の費用で

⑯ 物質名詞(不可算名詞)を数える際に使う表現。

1. a cup of coffee	「一杯のコーヒー」
2. a glass of water	「一杯の水」
3. a slice of bread	「一枚のパン」
4. a loaf of bread	「一塊のパン」
5. a bottle of ink	「１本のインク」
6. a sheet of paper	「一枚の紙」
7. a spoonful of sugar	「（スプーン）一杯の砂糖」
8. a lump of sugar	「（一個の）角砂糖」
9. a cake[bar] of soap	「（一個の）石けん」
10.a piece of baggage[luggage]	「（一個の）荷物」
11.a piece of furniture	「（一個の）家具」
12.a piece of information	「１つの情報」
13.a piece of advice	「１つの忠告」

14.a pair of が前に付く名詞。☞「対(二つ一組)」で一つのものとなる名詞に付く。

glasses[spectacles]「眼鏡」	scissors「はさみ」	trousers「ズボン」
chopsticks「箸（はし）」	pajamas「パジャマ」	pants「パンツ」
shoes「靴」	socks「靴下」	gloves「手袋」

- information や advice,news 等の抽象名詞を数える場合には「a piece of～」を用いる。
- 「a pair of～」が前につく名詞は、常に複数形で用いる名詞である。

【全訳】

「私達の多くは、起きている時間の一定の割合を白昼夢を見たり、物思いにふけったりすることに使っていると言われている。ある有名な心理学者は、白昼夢とは、注意を肉体や頭を使う作業からそらし、次々と展開していく一連の個人的反応へと向けることであると定義している」

《課外授業10》

「(主格の)関係代名詞+ be動詞」は省略できる。

以下の英文の意味がわかりますか?

① Those present were impressed with the story.

② The police arrested all those concerned in the kidnapping.

まず２つの文中の those ですが、LESSON BOOK REVIEW Rule-55 1。にある通り、文中の代名詞の those は「the people」又は「the+既出の複数名詞」の代用です。ここでは(①②の those 共に) the people の代用と見ればいいでしょう

⇒ The people present were impressed with the story.

⇒ The police arrested all the people concerned in the kidnapping.

次に、それぞれの those の後ろに「(主格の)関係代名詞+ be動詞」(ここでは①②共に who were) が省略されていると見るとよいのです。すると

⇒ The people who were present were impressed with the story.
S ↑ V

⇒ The police arrested all the people who were concerned in the kidnapping.
S V O ↑

という修飾関係が見えてきます。これがわかれば①は「出席していた人々はその話に感動した」、②は「警察は誘拐に関わった者全員を逮捕した」と訳せます。

そしてこの考え方は、以下のような文法問題でも素早い解法を与えてくれます。

The problem (　　) at the next meeting is how we can cut down on light and fuel.

① discussed　② to be discussed　③ discusses　④ being discussed

まず③を正解としてしまうと文中の動詞は３つ (discuss, is, cut) になり、

その英文の動詞の数－１＝その英文の(従位)接続詞・関係詞・疑問詞の数

のルールから、(従位)接続詞・関係詞・疑問詞のいずれかが２つ必要になりますが、文中にはそのようなものは how しかありませんから、③は不正解ということになります。
残る①②④ですが、本問も The problem の後ろに「(主格の)関係代名詞+be 動詞」(ここでは①②④共に which is) が省略されているとみて、それを補ってそれぞれの選択肢の可能性を考えてみると良いのです。

① The problem which is discussed
(日常的に) 議論される問題
the problem discussed は the problem which has been discussed つまり「既にこれまで議論されてきた問題」という意味になることもある。

② The problem which is to be discussed
(これから) 議論されるであろう(べき)問題
is to は will もしくは should を表す、いわゆる be to 構文。
LESSON BOOK REVIEW Rule-33 を参照せよ。

④ The problem which is being discussed
今この場で議論されている最中の問題

直後の(未来を表す副詞句の) at the next meeting と結びつきうるのはそうすると②しかないということがこれでわかるわけです。
問題文全体は「次の会合で議論されるであろう(べき)問題は、どのように電力消費を削減するかである」となります。

4. ①Our world is clearly getting smaller and smaller, not in the physical sense, but in the social and psychological sense. ②Our lives are closely connected with the lives of others across the planet. ③Be it in Asia, America or Africa, any sudden change influences us all.

《語句》 not A but B:Aではなくて B
physical:①物理的な ②肉体的な、肉体の ③物質の
in ～ sense:～な意味で(は)
be connected with A:AはBと結びついている
=A is linked[related] to[with] B
the planet:地球
=the earth
influence:～に影響を与える
=affect

【解答＆解説】

①
ここは、語句さえわかればさほど問題ないでしょう。比較級 and 比較級は「ますます～、どんどん～」と訳します。ただ not A but B は頻出表現ですから要注意。not ～ sense までは副詞句で is getting を修飾しています。
is getting という進行形の訳出については、Part Ⅰ 10.の解説を参照してみてください。この部分の訳は以下のようになります。

「我々の世界は明らかにどんどん小さくなりつつある。物理的な意味においてではなく、社会的・心理的な意味において」

②
the lives 以降は以下のような修飾関係になっています。

the lives of others across the planet

others については LESSON BOOK REVIEW Rule-55 2. を参照してください。ここでは other people の代用と見ればいいでしょう。そうするとこの部分の訳は以下のようになります。

「私達の生活は地球上いたるところの他の人々の生活と密接に結びついている」

③
Be～ と、動詞の原形で始まっていますね。みなさんが知っている動詞の原形で始まる英文というと命令文がありますが、本問はそうとらえては意味が通じません。実はこれは譲歩構文なのです。「Be it (ever so)…」で、譲歩(たとえ～としても)を表す決まり文句的な表現なのです。
LESSON BOOK REVIEW Rule-48 を参照せよ。

そうすると③の和訳はこのようになります。

「たとえそれがアジア、アメリカ、あるいはアフリカにおけるものであろうと(も)、いかなる突然の変化も、私たち全員に影響を与えるのだ」

【全訳】

「物理的な意味においてではなく、社会的・心理的な意味において、我々の世界は明らかに 小さくなりつつある。私達の生活は地球上いたるところの人々の生活と密接に結び ついている。たとえそれがアジア、アメリカ、あるいはアフリカにおけるもの であろうと(も)、いかなる突然の変化も、私たち全員に影響を与えるのだ」

5. ①Nowadays, many people prefer to live in cities, for they would be free to do things there that cannot be done in the country. ②On the other hand, in the country, you have to live the way your neighbors do.

《語句》 prefer to do[原形]～:～するのを(より)好む
be free to do[原形]～:自由に～する
on the other hand:その一方
neighbor:隣人、近所(周囲)の人

【解答＆解説】

①
ここは問題ないはずです。there は in cities を指しています。その直後の that は関係代名詞。その理由は that の直後に(主語の欠けた)不完全な文があるからです。
LESSON BOOK REVIEW Rule-９ を参照せよ。

そして 関係代名詞の that の働きは(直)前の名詞を修飾することだけ。そこで that 節は(there は副詞なのでこれは飛び越えて) things を先行詞とし、これを修飾していると見ます。
それから ，for S+V～ は「というのは～だからだ」と訳すんでした(for は接続詞)。そうすると①の訳はこんなふうになるでしょう。

「近頃では、多くの人々は都会に住むことを好む。というのは、そこでは田舎でできないようなことを自由にすることができるだろうからだ」。

ここで１つポイントをあげるとすれば、英文は cannot be done と受動態ですが、和訳の方は「できない」と能動的に訳している点です。英語でいくら受身で書いてあっても、和訳の際にはできるだけ能動的に訳出するといい、というルールがあります。

②
問題は the way です。「その方法」では意味不明です。
実は the way は後ろに「S+V」を伴って、接続詞的に用いることがあるのです。
LESSON BOOK REVIEW 84ページ(注4) を参照せよ。

本問では、直前の動詞 live は基本的に自動詞で、後ろに目的語をとることはありません。とするとどうやらこの the way は、「～のように」と訳した方がいいようです。そうすると全体はこんなふうになりますね。

「その一方、田舎では周囲の人たちと同じように生きていかなければならない」

文末の do は、前の live の繰り返しを避ける代動詞(の do)と見ればいいでしょうそれから ycu はあえて訳出しませんでした。

【全訳】

「近頃では、多くの人々は都会に住むことを好む。というのは、そこでは田舎でできないようなことを自由にすることができるだろうからだ。その一方、田舎では周囲の人たちと同じように生きていかなければならない」

6. ①History is full of kings and emperors, of great persons and of wicked persons, but of common people, it had nothing to say. ②And the extent to which wars and revolutions affected civilians was a matter on which history was silent.

《語句》be full of A:Aに満ちあふれている、Aでいっぱいだ
emperor:皇帝
wicked:邪悪な
common:一般の、普通の、よくある
affect:～に影響を与える
civilian:一般人、民間人
matter:問題、事柄

【解答＆解説】

①
but の手前までは大丈夫でしょう。wicked については bad型の形容詞と類推できれば、「悪い」という意味は書けたでしょう。和訳は「歴史は、王様や皇帝、偉人や悪人たちに満ちあふれている」となります。

History is full
Ⓢ Ⓥ C

of kings and emperors
of great persons
and
of wicked persons

3つの「of+名詞」はA, B and C の並列構造になっている。LESSON BOOK REVIEW Rule-11 3. を参照せよ。

問題は but の直後の of です。どう訳せばいいのでしょう。実は LESSON BOOK REVIEW Rule-66 に、文頭(節頭)の of の可能性については、以下の３つの可能性があると書いてあります。。

(1)「～について」 =about

(2)「～のうちで」 =among

⑶『of+抽象名詞』が文頭に飛び出した倒置構文

本問の of は⑴、つまり「～について(は)」と訳す of だったのです。そうすると全体は、こんな和訳に仕上がります。

「しかしながら、一般の人たちについては、歴史は何も語ってこなかった」。

②
ここは the extent to which の訳出に苦労しますね。これを上手く日本語にするための裏技はこれです。

「the extent to which S+V～」は「how much S+V～」で書き換えられる

how much ということは、具体的には「どの程度」「どれくらい」と訳せばいいのです。練習してみましょう。以下の英文の意味がわかりますか？

(ex) We didn't know the extent to which he was responsible for this.

上のルールから、the extent 以下は how much he was responsible for this と読み換えればいいですね。そうすると全体は「どれほど(どの程度)彼がこのことに責任があるのかわからなかった」と訳せてしまえます。

②もそうすれば、こんなふうに訳せます。

「そしてどの程度戦争や革命が一般人に影響を与えたかは、歴史が沈黙して語らない問題なのである(歴史は黙して語ろうとはしない)」

【全訳】

「歴史は、王様や皇帝、偉人や悪人たちに満ちあふれている。しかしながら、一般の人たちについては、歴史は何も語ってこなかった。そしてどの程度戦争や革命が民間人(一般人)に影響を与えたかは、歴史が沈黙して語らない問題なのである(歴史は黙して語ろうとはしない)」

《課外授業11》

英文中での不定詞の解釈の仕方について。

今回は英文中における不定詞の解釈の仕方についてまとめてみましょう。

(1)まず基本は LESSON BOOK REVIEW Rule-28。

(2)「目的」「結果」以外のその他型(副詞用法)の不定詞の訳し方については LESSON BOOK REVIEW Rule-29～32 を用いて処理する。

(3)be to 構文。☞LESSON BOOK REVIEW Rule-33 を参照せよ。

(4)文中での位置、構造からその意味を読み取ることもできるものもある。

①LESSON BOOK REVIEW Rule-57

②LESSON BOOK REVIEW Rule-23 3.

③「動詞+to do[原形]～」型 ☞「課外授業６」を参照せよ。
O

④副詞用法の不定詞を用いた慣用表現。

1. ～ enough to do[原形]…　「とても～なので…」
=so ～ as to do[原形]…　「…するほど(十分)～」
=so ～ that S+V…

この構文は、上のように、文脈によって２種類の訳し方の可能性がある。
注意点は以下の２点。
(1)「～」の部分には「形容詞」や「副詞」が入る。
(2)「enough+(形・副)+to do[原形]…」という形はない。
※つまりenoughは必ず「形容詞」「副詞」の後ろに置かれる!
以下に例文をあげておこう。

(ex) He was kind enough to show me the way.
=He was so kind as to show me the way.
=He was so kind that he showed me the way.

彼は親切だったので、私に道を教えてくれた

You are old enough to know this.
=You are so old as to know this.
君はこのことを知っていてもよい年だ

2. too ～ to do[原形]…　「あまりに～なので…できない」
=so ～ that S+cannot[don't]+do[原形]…

この構文も文脈によっては「…するにはあまりに～すぎる」と後ろから訳し上げた方がいいこともある。
また ～ enough to do[原形]… と同じように「～」の部分には「形容詞」「副詞」が入る。

(ex) I was too tired to finish the work yesterday.
=I was so tired that I couldn't finish the work yesterday.
私は非常に疲れていたので昨日その仕事を終えられなかった

The rock was too heavy for me to lift.
=The rock was so heavy that I couldn't lift it.
その岩はあまりに重たかったので私は持ち上げられなかった
上の英文の場合、不定詞の前にfor meという意味上の主語がついたパターン。更に、文の主語(the rock)と不定詞の目的語が同じ[一致する]ので、不定詞の目的語(it=the rock)が省かれてしまっている。

なお、このいわゆる too ～ to構文と似て非なるものに、very と同じ意味の only too に副詞用法の不定詞がくっついたものがあり、引っかけ問題としてよく狙われます。例をあげてみましょう。

(ex) He was only too glad to come with you.
彼はあなたとご一緒できて、とても喜んでいた

上の英文は、only too glad(とてもうれしい)の後の to come～ は「感情の原因」を表す単なる副詞用法の不定詞(「～して、できて」と訳す)に過ぎず、これを too ～ to構文と勘違いしてはいけません。

3.独立不定詞。
これらについては、(不定詞を用いた)一種のイディオムとして覚えてしまいましょう。
1.to say the least (of it)　「控えめに言っても」

2.to begin[start] with 「まず第一に」
3.needless to say,～ 「～は言うまでもない」
=it goes without saying that～
4.to tell[speak] (you) the truth 「実を言うと」
5.to be frank with you 「率直に言って」
6.strange to say 「奇妙なことに」
7.not to mention A 「Aは言うまでもなく」
8.not to say A 「Aとは言わないまでも」
9.to be brief 「手短に言えば、要するに」
10.to sum up 「要約すれば」
11.to say nothing of A 「Aは言うまでもなく」
=not to speak of A
=not to mention A
12.to make a long story short 「かいつまんで言うと、早い話が」
13.to do A justice 「Aを公平に評すれば」
14.to make matters worse 「更に悪いことに」
15.to add to A 「Aに加えて」
16. to conclude 「結論として言えば」
17. to put it in another way 「別の言葉で言えば」
18. to be accurate[exact] 「正確に言うと」

⑤慣用的な「be動詞+形容詞・分詞+to do[原形]～」。
1.be sure[certain / bound] to do[原形]～:必ず～するだろう
2.be likely to do[原形]～:～する可能性がある
⇔ be unlikely to do[原形]～:～する可能性はない
3.be inclined to do[原形]～: ①～したい気がする
②～しがちだ、～する傾向がある
4.be determined to do[原形]～:～することを決心している
5.be anxious[eager / keen] to do[原形]～:～することを切望する
6.be ready to do[原形]～:①～する覚悟[準備]ができている
②喜んで～する
③今にも～しようとする
④～しがちだ ☞too ready となることが多い。
7.be willing to do[原形]～:喜んで～する
⇔ be unwilling[reluctant] to do[原形]～:～したがらない

8.be apt[prone / liable] to do[形]～:～しがちだ

prone と liable の場合、to が前置詞として用いられることもある

(ex) She is prone[liable] to idleness. 彼女は怠けがちだ

⑸複数の訳し方が可能な(つまりどちらでもいい)場合もある。

下の英文を見てください。

(ex) He took some time to get his cool down.

to ～ down を some time にかかる形容詞句と考えれば、「冷静さを取り戻すための少々の時間を彼はとった」となり、took にかかる副詞句と考えれば「冷静さを取り戻すために、彼は少々時間をとった」となります。どちらで解釈しても結構です。

⑹語法、あるいは文脈判断(つまり日本語に訳してみて判断する)に頼らざるを得ない場合もある。

下の英文を見てください。

(ex) That is the way to understand great art.

to ～ art は、構造的には is という動詞、 the way という名詞、どちらにもかかり得ますが、is にかかる副詞句と見て和訳しても、意味不明になってしまいます。そこで、the way を修飾する形容詞句と判断し、「それが偉大な芸術を理解する方法です」と訳します。
また以下の英文を見てください。

(ex) Reading provides pleasure to enrich your life.

一見「S+V+O+to do[形]～」型の第五文型のようにも見えますが、provide という動詞はそのような文型は取りません(第三文型、つまりＳＶＯしか取らない)。つまり provide の語法から to enrich 以降は文の主要素にはなっていないと判断しなくてはなりません。
で to enrich your life の訳ですが、ここも文脈判断で pleasure にかけて訳します(つまり形容詞句と見る)。そうすると以下のようになります。
「読書は人生を豊かにしてくれる楽しみを提供してくれる」

7. What counts most is the ability to think logically, to find out false grounds and improper evidence to see more than one side of an affair and to judge which is best to make words work with utmost clearness and correctness.

《語句》

false grounds:まちがった論拠
improper:不適切な ⇔ proper:適切な
evidence:証拠
more than one A:複数のA ☞「１つ以上のA」等と訳さないように！
affair:事柄、問題
=matter
utmost:最大限の
clearness:明快さ
correctness:正確さ

【解答＆解説】

What counts の count は「重要だ」という意味。本問の最大のポイントは ability 以降の(to不定詞の)並列構造をきちんとつかめたかどうかでした。全体の構造分析図は以下のようになります。

What counts most (Ⓢ 最も重要なこと) is (Ⓥ) the ability (C 能力)

- to think logically（論理的に（ものを）考える）
- to find out（見破る）
  - false grounds
  - and（まちがった論拠）
  - improper evidence（不適切な証拠）
- to see more than one side of an affair（事柄）
  - and
  - to judge which is best（（そのうちの）どれが最善か）
- to make words work
  - 〈O〉 〈C〉 ↑
  - with utmost
    - clearness
    - and（明快さ）
    - correctness.（正確さ）

to see more ～ affair と to judge ～best は合わせて一つの行為(意味のまとまり)と判断した方がいいでしょう。
文末の with は having つまり「最大限の明快さと正確さを持って」と訳してもいいでしょう(図のように with ～ correctness は work を修飾する副詞句)。

「with+抽象名詞」は副詞化するというルールがある。
たとえば「容易さ」という意味の抽象名詞、ease に with をつけて、

with ease

とすると、これは「容易に(簡単に)」という意味になり、副詞の easily と同じ意になる。他の例もいくつかあげてみよう。

① with difficulty	= difficulty	「やっとのことで、かろうじて」
② with success	= successfully	「首尾よく」
③ with diligence	= diligently	「勤勉に」
④ with kindness	= kindly	「親切にも」
⑤ with care	= carefully	「注意深く」
⑥ with rapidity	= rapidly	「素早く」
⑦ with fluency	= fluently	「流暢に」
⑧ with calmness	= calmly	「落ち着いて」

⑨ with energy　　＝ energetically「精力的に」
⑩ with reserve　　＝ reservedly　「遠慮して」
⑪ with warmth　　＝ warmly　　「暖かく」
⑫ with vigor　　＝ vigorously　「勢いよく」

本問末尾の with 以下は、上記のルールを利用して most clearly and correctly と読み換え、「この上なく明快に(そして)正確に」と訳しても良い。

make words work は、直訳は「言葉にその仕事をさせる」ですが「言葉を操る[使いこなす]」くらいの意訳でいいでしょう。そうすると問題文全体はこんなふうになります。

「最も重要なことは、ものを考え、まちがった論拠や不適切な証拠を見破り[見抜き]、ある事柄の複数の面を見てそのうちのどれが最善かを判断し、最大限の明快さと正確さをもって言葉を使いこなす能力である」

8. I found it curious to watch a tobacco company executive testify on television before a special government committee that nicotine is not addictive, an incredible statement which he made with straight face. (山口大 改)

《語句》curious:①興味深い ②好奇心旺盛な、詮索好きな
executive:重役
testify:証言する
committee:委員会
addictive:中毒性の
incredible:(物事が)信じがたい、信用できない
statement:発言、声明
straight face:真顔、真面目な顔

【解答＆解説】

全体構造は I がＳ(主語)、found がＶ(動詞)、it は仮目的語(to watch ～ addictive が真目的語)、curious がＣ(補語)の第五文型(ＳＶＯＣ)です。「to watch 以下を見るのは興味深かった」とまとめればいいでしょう。

found は訳出しなくてもいい。

次に watch 以下の構造分析図を示して見ましょう。

to watch　a tobacco company executive testify
〈O〉　重役　〈C〉　証言する

on television　before a special government committee
政府の特別委員会

that nicotine is not addictive ,
(接)　S ニコチン　V　C 中毒性の
(testifyの)〈O〉

an incredible statement [which he made with straight face].
信用できない　発言　S　V　真顔

to watch ～ addictive までは「あるたばこ会社の重役が政府の特別委員会で、ニコチンは中毒性のものではないと証言するのをテレビで見る(こと)」となります。

watch O do[原形]～
C

で、「Oが～するのを見る」となります。
問題は an ～ face の役割です。an incredible statement は(裸の)名詞ですが、文の骨組みは、既にできあがっており、これが文の主要素になることはありません。ではこれはどんな働きをしているのでしょうか？ 実はこの部分は直前の文(nicotine is not addictive)と同格になっているのです。LESSON BOOK REVIEW Rule-61 2.(4)を見てみてください。そこには「文+名詞」の同格は

「名詞」の前に「接続詞 + it is[was]」を補ってみるといい。

と書いてありますね。本問もこの部分を

but it was an incredible statement which～.
しかしそれは～の(ような)信用できない発言であった

とまとめればいいのです。
which節内の with は「手段・原因」と判断し、「～で(もって)」と訳せばいいでしょう。
そうすると問題文全体は以下のような訳になります。

「あるたばこ会社の重役が政府の特別委員会で、ニコチンは中毒性のものではないと証言するのをテレビで見るのは興味深いことだったが、しかしそれは彼が真顔で行っ

た信用できない発言であった」

最後に一つだけ。形式目的語[仮目的語]構文についてまとめておきましょう。
目的語が長すぎるような場合に、本来目的語を置く位置に、仮の目的語[仮目的語、又は形式目的語]、it を置いて、本当の目的語[真目的語]を節の後半に持ってくるという、いわゆる形式目的語[仮目的語]構文というものがあります。その３大代表選手が以下の３つです。

① 「consider[think] O(名) C(形・分・名)：OはCだと思う[みなす]」

⇨ consider[think] it (形・分・名) / C
- to do[原形]～
- doing～　～するのはCだと思う[みなす]
- that節など

(ex) The politician considered it rude to say such a thing in public.
その政治家は、そんなことを人前で言うのは失礼だと思った

② 「make O(名) C(形・分・名)：OをCにする」

⇨ make it (形・分・名) / C
- to do[原形]～
- doing～　～するのをCにする
- that節など

makeの場合、Cに入る分詞は、過去分詞のみ。

(ex) The computer system will make it easier to do our business.
そのコンピュータシステムのおかげで業務がより容易になるだろう

③ 「find O(名) C(形・分・名)：OはCだと思う[分かる]」

⇨ find it (形・分・名) / C
- to do[原形]～
- doing～　～するのをCだと思う[分かる]
- that節など

(ex) We found it very hard going back to our basecamp in the storm.
その嵐の中をベースキャンプに戻るのは大変苦労だった

更にこの形式目的語構文には慣用的なものもあり、それらは文法・作文問題で頻出です。以下のものはしっかり覚えましょう。

(1) see [to it] that S＋V～：～するよう取り計らう、気をつける

(ex) I'll see to it that there is no such mistake again.
私はそんなまちがいが二度と起こらないように気をつけよう

⑵ take it for granted that ＳＶ～:～するのを当然とみなす

(ex) I took it for granted that my close friend would agree.
私は親友が同意するのは当たり前だと思った

⑶ make it a rule[habit] to do[原形]～:～するのを習慣にする

(ex) I make it a rule to go for a walk before breakfast.
私は朝食前に散歩することにしている

⑷ have it that ＳＶ～:～だと言う

(ex) Rumor has it that she was an actress when young.
うわさでは彼女は若いころ女優だったそうだ

⑸ depend on it that ＳＶ～:～するということを当てにする

(ex) You should not depend on it that your parents offer financial aid.
君は両親が財政的な援助をしてくれるのを当てにすべきでない

⑹ take it that ＳＶ～:～だと思う

(ex) I take it that she is the criminal. 私は彼女が犯人だと思う

⑺ owe it to A that S+V～:～する(した)のはＡのおかげだ
owe it to A to do[原形]～ :Ａに対して～する義務を負っている

(ex) You owe it to your friends that you have been able to redeem your honor.
君が名誉を回復できたのは友人たちのおかげです
We owe it to society to make our country a better place.
我々は社会に対してこの国をよりよい所にする義務がある

これらは、目的語が長すぎるからというよりは、直接後ろに節等を目的語をとることができないので、仮の目的語 it をたてて、その後に本当の目的語を置いたというものが多い。

9. Not only an extraordinary entertainment medium, cinema also gives a kind of presence to the world unparalleled elsewhere, and undreamed of before the cinema was invented.

（大阪大 改）

《語句》extraordinary:並外れた
medium:媒体
presence:存在感
unparalleled:並ぶもののない
invent:発明する

【解答＆解説】

出だしの Not only は、おなじみの not only A but also B(Aだけでなく B もまた)の変形で、普通に書き直せば以下のようになります。

Cinema gives not only an extraordinary entertainment medium (but) also a kind of presence to the world

映画は並外れた娯楽媒体のみならず、ある種の存在感を世界に与えてくれる

問題は unparalleled elsewhere, and undreamed of before the cinema was invented の部分。unparalleled も undreamed も(一種の)形容詞です。この部分は２通りの訳出の仕方が考えられるでしょう。１つは unparalleled ～ invented は a kind of presence
を修飾していると見る考え方。

～ a kind of presence to the world

unparalleled elsewhere, and undreamed of before the cinema was invented

before ～ invented は undreamed を修飾している。

そう考えれば「他に並ぶものがなく、映画が発明される以前には夢想だにされなかったようなある種の存在感(を世界に与えた)」と訳せます。

もう１つは、この部分を形容詞で始まる文章後半に現れた分詞構文とみなし、「そして～(する)」とまとめてしまう方法です。

LESSON BOOK REVIEW Rule-37 3.4. を参照せよ。

そうすると unparalleled 以下はこんなふうになるでしょう。

「そしてそれ[その存在感]は、他に並ぶものがなく、映画が発明される以前には夢想だにされないものだった」

【全訳】

「映画は並外れた娯楽媒体のみならず、ある種の存在感を世界に与えてくれる。そしてそれ[その存在感]は他に並ぶものがなく、映画が発明される以前には夢想だにされないものだった」

10. ①If you ask people what accurately a right is, they may be at a loss, and may not be able to answer the question clearly. ②Of course they will know what it is to invade somebody's rights and what it is to have their own right to this or that denied or ignored by other people. ③However, what exactly is it that is being invaded or unjustly denied? ④Should right be something you achieve or something you inherit at birth?

（東京大 改）

《語句》right:権利
ordinary:普通の
accurately:正確に
be at a loss:当惑してしまう
invade:侵害する
this or that:あれやこれや(いろいろなこと)
deny:否定する
ignore:無視する
unjustly:不当に
achieve:獲得する
inherit:受け継ぐ
at birth:生まれた時に、生まれつき

【解答＆解説】

①
If節内で、「ask O_1 O_2:O_1 にO_2について尋ねる」という語法が使われています。
pecpleが O_1 、what～isが O_2 ですね。そうするとこの部分は以下のようになります。

「もし人々に権利とは正確に(言って)何なのですかと尋ねれば、彼らは当惑し、明確にその質問に答えることができないかもしれない」

②
theyがＳ(主語)、will kncwがＶ(動詞)、２つのwhat節が共にＯ(目的語)の第三文型(ＳＶＯ)です。「もちろん彼らは what以下のことを知っているだろう」が大枠の意味。それぞれの what 直後の it は仮主語で、(それぞれ)後の不定詞句が真主語にな

っています。

Of course //

they will know
Ⓢ Ⓥ

what it is to invade someone's rights
S V
and
what it is to have their own right to this or that
S V
{denied / or / ignored} by other people
O

和訳ですが、what it is to invade someone's rights が「ある人の権利を侵害するというのはどういうことなのか」という意味になるのはいいとして、２つ目のwhat節が構造・意味共に厄介です。
これを上手くつかむためには、to this or that(あれはこれやに対する)という前置詞句を(　　)でくくってみるとよかったのです。すると

→ have their own right denied or ignored by others.

という構造が見えてきます。これは「have+O+C[p.p.]:Oを～される」という、使役の have が作る語法です(their own right がO、denied or ignored がp.p.)。

→ have their own right (O) denied or ignored (C[p.p.]) by other people.

つまり「自分自身の権利を他人から否定されたり無視されたりする」となります。これに「あれやこれや[いろいろなこと]に対する」を付け加えればいいわけです。そうするとここは「いろいろなことに対する自分自身の権利が、他の人に否定されたり無視されたりするのはどういうことなのか」となります。
②全体をまとめると、「もちろん、ある人の権利を侵害するというのはどういうことなのか、そしていろいろなことに対する自分自身の権利が、他の人に否定されたり無視されたりするのはどういうことなのかということは、彼らはわかっているだろう」となります。

『前置詞+名詞』は、基本的に文の主要素になることはないので、文の骨組みを探る際にはいったん(　　)でくくってみるといい。

というルールは、これまで繰り返し説明してきました。しかし今回このルールをうまく使えず、構造を見極められなかった人もいると思います。わかっているはずなのに、実際使うべきところでそのルールを効果的に使えないという人が結構多いのです。自由自在に、臨機応変に"使いこなす"ことができるようになるためには、やはり一にも二にも練習あるのみ、ですネ。

③

この英文の構造、理解できましたか？ However，の後ろが

疑問詞 + is it that+平叙文の語順?

という構造になっていますね。これは疑問詞(ここでは what)を強調する強調構文なのです。

例えば以下のような英文。

(ex) What do you want to know? 君が知りたいのは何ですか

これを強調構文にしようとすれば、以下のようになる。

⇒ What **is it that** you want to know?
[平叙文の語順]

このように疑問詞の後ろに is[was] it that を置いて、その疑問詞を強調する。

この手の強調構文は is[was] it that の部分をカッコでくくってしまうといいのです。そうすると

what exactly is being invaded or unjustly denied?

という英文が見えてきますね。訳はこんな感じになります。

「しかし、正確には、侵害されかけていたり、不当に否定されようとしているもの[こと]とは、一体(全体)何なのであろうか」

進行形の訳し方については Part I 10.の解説を参照せよ。

一応強調構文なので、上のように「一体(全体)」といった言葉を、疑問詞の訳の前に付け足してあげるといいですネ。

④

２つの something you achieve、 something you inherit at birth は、共に「名詞 S+V」の構造です。それぞれの you 以下を something にかけて訳せばいいですね。
LESSON BOOK REVIEW Rule-52 を参照せよ。

something [you achieve] 私たちが獲得するもの
↑ S V

something [you inherit at birth] 私達が生まれつき受け継いでいるもの
↑ S V ↑

となります(youは「一般の人」を表している。「私たち」「自分(たち)」くらいの訳でまとめるか、もしくは訳さなくてもいい)。全体は「権利とは、私たちが獲得するもの、あるいは生まれつき受け継いでいるものであるべきなのだろうか」となります。

【全訳】

「もし人々に権利とは正確に(言って)何なのですかと尋ねれば、彼らは当惑し、明確にその質問に答えることができないかもしれない。もちろん、ある人の権利を侵害するというのはどういうことなのか、そしていろいろなことに対する自分自身の権利が、他の人に否定されたり無視されたりするのはどういうことなのかということは、彼らはわかっているだろう。しかし、正確には、侵害されかけていたり、不当に否定されようとしているもの[こと]とは一体(全体)何なのであろうか。権利とは、私たちが獲得するもの、あるいは生まれつき受け継いでいるものであるべきなのだろうか」

《課外授業12》

ネクサス(NEXUS)

さて皆さんネクサス(NEXUS)という言葉を聞いたことがありますか? これは簡単に言うと「意味の上での主語と述語の関係」のことです。例えば

(ex) It is important for you to study hard.

君は一生懸命勉強することが大切だ

上の英文中の(構文上の)S+Vはもちろん It is ですが、for you の you と to study の間にも「君が勉強する」という(意味の上での)主語と述語の関係が成立しています(LESSON BOOK REVIEW Rule-35 を参照せよ)。このように構文[文型]上以外にも、(繰り返しますが)意味の上での主述関係が英文の中で成立している場合があり、その場合にはこれを意識(して訳出)することは、読解では大切な作業となります。
では(上述の for A to do[原形]~以外で)ネクサスが成立するパターンをまとめてみましょう。

①[SVOC構文における] OとC
LESSON BOOK REVIEW Rule-23 を参照せよ。

②所有格[目的格・名詞]と(それらが修飾する)動名詞
LESSON BOOK REVIEW Rule-35 を参照せよ。

③[分詞構文における] 名詞と(それに続く)分詞
LESSON BOOK REVIEW Rule-35 を参照せよ。

④[with O C構文における] OとC

(ex) She was sitting on the bench with her eyes closed.

彼女は目を閉じてベンチに座っていた

her eyes と closed にネクサスが成立している。Her eyes were closed(彼女の目は閉じていた)と読み換えることができる。
with O C 構文そのものについては LESSON BOOK REVIEW Rule-37 5. を参照せよ。

⑤所有格と(それが修飾する)名詞

(ex) He proved his innocence. 彼は自分が無罪であることを証明した

his と innocence にネクサスが成立している。He was innocent(彼は無実だった)と読み換えることができる。
ただし全ての所有格と(それに続く)名詞との間にネクサスが成立するわけではない。LESSON BOOK REVIEW P45 Rule―４ を参照せよ。

⑥形容詞・分詞と(それらが修飾する)名詞

(ex) They were displeased with his increasing reputation.
彼の名声がますます高まっていくことを彼らは快く思わなかった

increasing と reputation にネクサスが成立している。His reputation was increasing(彼の名声は高まった)と読み換えることができる。

⑦[主格の of が作る] A of B

(ex) The world has changed with the appearance of the new computer.
新しいコンピュータの登場で世の中は変わった

the new computer と the appearance にネクサスが成立している。The new computer appeared(新しいコンピュータが登場した)と読み変えることができる。
これ以外にも「目的格の of が作る A of B」などもあるので注意(LESSON BOOK REVIEW P42 Rule-３を参照せよ)。

⑧[There be動詞+S(名詞)+分詞. における]S(名詞)と分詞
これについては LESSON BOOK REVIEW Rule-44 を参照せよ。

【問題演習】

When the necessity of close scientific study being made of some medicine arises, it is no use a researcher giving it to subjects throughout certain period and asking them at the end whether they thought it had a good effect.

《語句》

necessity:必要性
medicine:薬
arise:生じる
it is no use doing～:～しても無駄だ
subject:被験者
throughout:～の間中
at the end:最後に
ask A(人) whether S+V～:Aに～かどうか尋ねる
have a good effect:とても効果がある

【解答＆解説】

(1)まず構造分析図を示してみよう。

When the necessity of close scientific study being made of some medicine
S
arises, //
V

it is no use a researcher giving it to subjects throughout certain period
Ⓢ Ⓥ
and
asking them at the end

whether they thought it had a good effect.

(2)訳出における第一のポイントは、close scientific study という名詞と直後の being made という動名詞の間にネクサスが成立していたことに気付いたかどうか。

close scientific study (主) being made (述)

ここは「綿密な科学的研究がなされる」となる。of some medicine の of は「～について、関して」という意味。some は「ある」と訳す。

⑶第二のポイントは、 a researcher と giving、asking の間にもネクサスが成立していたことに気付いたか。ここは「研究者が与える」「研究者が尋ねる」となる。

a researcher (主) ｛ giving (述) it to subjects throughout certain period
and
asking (述) them at the end whether they thought it had ～ effect.

【全訳】
「ある薬に関して綿密な科学的な研究の必要性が生じた場合、研究者がそれを被験者にある一定の期間の間中与え、最後に彼らにそれがとても効果があったか尋ねても無駄である」